

あれから 10 年「3・11」の衝撃

東日本大震災・福島第一原発事故から 10 年になる。2011 年 3 月 11 日は忘れることができない。忘れてはならない日だ。あの日、名古屋市立大の研究室で何とも言えない揺れを感じ廊下に出た。そのあと会議室のテレビをつけると、巨大津波が街を、人を襲う映像が流れていた。茫然として声も出なかった。

現地にも行けず、何もできなかったが、とりあえず『復興支援地図』を 2 冊買い求め、1 冊はゼミ室において学生に活用してもらうことにした。震災・原発関連の図書や雑誌を読んで、講義や講演などで紹介した。当時は、レポートを「中断」していたが、『ジャーナリスト』2011 年 4 月号に寄稿した拙稿（拙著『災後の新聞』所収）の一部を紹介したい。



東日本大震災は 4 月 11 日、発生から 1 か月を迎えた。いまだ被害の全貌すら明らかになっていない。がれきの中を必死に肉親らを捜し続ける人たち、放射能汚染により捜すこともできず、「帰れない町」に途方に暮れる人たち。涙なしに記事を読み進められない。3・11 大震災の報道を通じて、あらためて新聞の役割を痛感した。河北新報は震災で社内での製作ができなくなり、新潟日報で紙面を作って何とか翌朝の新聞を発行できた。阪神大震災のときの神戸新聞を想起させる。地元夕刊紙・石巻日日新聞は、震災翌日から壁新聞を作って避難所などに張り出した。情報が決定的に不足する被災者にとって、手書きの新聞がいかに貴重な情報源であったことか。

河北新報は震災翌日、「現代日本社会は初めて巨大複合型災害に直面した」と報じた。16 年前の阪神大震災と比べても、被災範囲は東北から関東に広がり、都市型と中山間地型の災害が並立している。大地震と大津波、それに「人災」といえる原発事故が重なる。世界有数の地震列島で起きたトリプル大災害、「原発災害」であるが、「想定外」ではすまされない。いまも強い余震が続く中、広域にわたる被災地の復興は困難をきわめている。一步、また一步、再建につながる長い道のりをともに手を携えて踏み出していこう（河北新報 4 月 11 日）。

写真下は東京新聞 Web による福島第一原発（2021 年 1 月）。その周辺は放射能で汚染した中間貯蔵施設が広がり、人が住めない。原発事故による放射能汚染は人々の暮らしと故郷を根こそぎ奪い、今も 4 万人以上が避難を続ける。



これからも東日本大震災と福島第一原発事故を見つめていきたい。

(2021 年 3 月 11 日)